

人間もむかし話、思ひ出話などをするようになって、そろそろだなんていわれるが、今年になってからもう三分の二もたったのに、まだ「明治百年、明治百年」という言葉を聞くこと、聞くこと。先日、栃木県の方へ出かけたなら、パチンコ屋のガラス戸に明治百年記念の何とか、とあつて驚いたが、バスから見たのでつい大事な呼びこみの文句を見落してしまった。

明治百年とパチンコとが関係があるくらいだから、自分だって何か百年に関係をつけるつもりで考えてみると、あるある、大分あるけれど今どきそんなことを書いても、全く愚の足しにならないことばかりである。

中村さんのところには、お祖母さんが佃煮にするほどあるなんていわれ、実際お祖母さんと呼ぶ人は私の少年時代には三人もいた。お祖母さんのお母さん、ヒイお祖母さんから揃っていたので、イヤイヤ話の古いこと、古いこと。「いえやすとは何です——権現さまのことでしょう。家康公といいなさい……」といった調子だから、嘉永、安政時分のことを、大東亜戦争前後のように話して聴かされた。

その中に、今でもふつと思ひ出すのは、文字の遊びとでもいったものがいくつあつたのを、漢字、仮名が飯の種の仕事をしているので時々ふつと思ひ出すことがある。

硯いし見を離れ鳴どり飛んで侍(さむらい)人を連れず——なあんだ——なんていう。答えは石山寺。

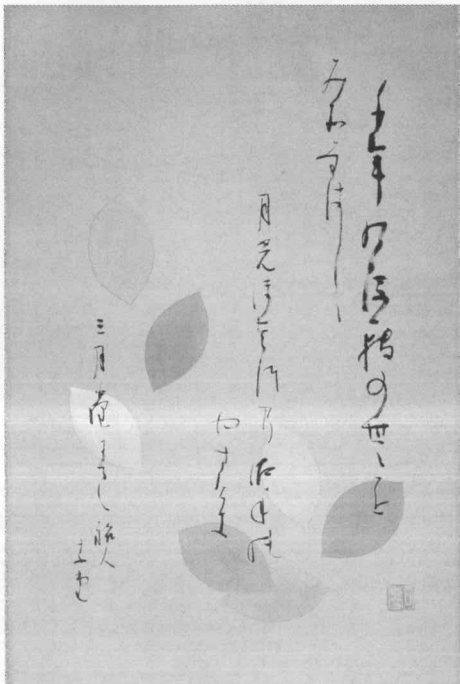
背を曲げた男が杖をついているのを乃の字のようだと調弄つたら、「何だ」と怒って杖を刀代わりに構えたので、オットそいつは「及ぶ」という字じゃと戯れたとか。

随筆古文学にある有名な重ね文字、牛の角文字を君は思ゆる——とは、こいだとか、小さな紙に砂粒が九つ入れてある手紙は、こいしくだとか、一八十の木々はひらばやしか、ひらりんかなど。字を遊びにしたものをかなり聞いていた。

さて、勤め人となって、役所に一日詰めているようになった。当今のようになどにも喫茶室などという息ぬき場がある時代ではない。そこでアマダというのをやる。一種の籤びきなのだが、総額一円の餅菓子を買って茶を入れるのを、籤で各自の拠出額を決め、お客といつて出費なしで分けまえをもらうのから使いに行くのまで籤でやる軽い遊び。

すこし凝って木篇の字、ウ冠りの字とかいうものを十分とか十五分とかの間に知っているだけ書き出して、少ない方ほど多額の拠金をする。随分無理をして、ありもしない字をデッチあげて数をかせぐ。大騒ぎで字引きをひいてみるとない。そういうのは一字について倍の拠出となる。ところがいいかげんに作つた字が、実際に字引きにはあつたが、じゃ何という字だと責められてバレたりして大笑い。でもあつたんだからいいだろう、イヤいかんで法理論みたいなものに発展したりしたが、今考えてみると、その時分の若い連中が字を知っていたのは、到底今日の比ではなかった。(つづく)

〔書道〕昭和四十三年



千年の流轉の世々をみそなはし  
月光菩薩のみ手のやすけき(ふぢばかま)

(昭和三十六年)